俺の生き様

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の生き様

【Ｎコード】
Ｎ３３９２Ｂ

【作者名】
ジャン

【あらすじ】
戦争から時は経ち、その世界を旅する一人の青年の生き様を書いた物語。青年は沢山の人に触れ会いその中で大切なものを見つける

第0話　プロローグ

この世界では、十年前に戦争があった。
その戦争は魔物と人間による大規模な物であった。
戦争は二年間続き、痺れを切らした人間達は全兵力を駆使し魔物のボスの討伐に成功。
しかしそれは全兵力の四分の一を失う事となった。そしてそれから時は経ち人々には平和が訪れる

様に思われた……

戦争から時は経ち人々はこの世界を我が物にしようと争い始める。
そんな世界を一人の青年が旅をする。この物語は一人の青年の生き様を描く物語である

「これが俺の生き様だ！」

第2話　助け

深い森の中、一人の青年は背中に自分の身長より大きな布が巻いてあるものをもち歩いている。

「ここどこだ？」

いや、迷っているらしい。

「ったく、あのくそ爺め。適当な事いいやがって……」

そう言いながらもしっかりと、目的地に向かっている事をこの青年はわかっていない。

そして青年が歩いていると

「いやあぁぁぁ！！」

女性の悲鳴が聞こえた。

青年は既に声のした方へ走りだしており、さっきまで『うんざり』といった表情だったのだが今は『真剣』な顔付きで走っている。

声のした方には女性の声が聞こえてくる

「やめろ！！私に触るな！！」

叫んでいるのは先程、悲鳴を上げた女性。女性の手を掴んでいるの

は、いかにも山賊といった感じの服装をしている男だった。

「ごちゃごちゃうるせぇんだよ！！お前は黙って俺様の言うことを聞いてりゃいいんだよ！」

「いやだ！！離せ、離せぇ！！」

女性は言葉と同時に男を押し放す。

押し放された男は、女性を睨み付け腰に挿していた剣を抜き女性に向ける

「最後だぁ！！大人しく俺の言うことを聞くか、このまま俺に斬られるか！！」

女性は大声を出し剣を構える男に後ずさる……が、男を睨み付け

「私はお前の言うことを聞かない！！それに斬られもしない！！」

男は女性が言うと、同時に女性に向かって走りだし剣を振るった

「死ねぇぇぇ！！」

「っ！！」

女性は固く目を閉じて自分に襲い掛かる激痛を覚悟した。

……が、感じたの斬られる激痛ではなく

『ガキンッ！』

と音を上げる剣戟の音だった。

そしてそこには

２m近くある剣を片手で持ち男の剣を防いでいる青年がいた

「なっ……」

男は自分の剣を片手で防いでいる青年を見て驚愕した顔をする。
男の体格は普通よりも大きく、むしろ巨体とも言えるほどの物だった。
しかし今自分の剣を防いでいるのは、確かに普通よりはガッチリしていて力もあるだろう。
だが、自分に比べると明らかに一回りは小さい青年に自分の本気で打ち下ろし、しかも両手で打ち下ろしたものを青年は防いでいる。

それも『片手』でだ。

男の混乱など知ったこっちゃないと言わんばかりに、青年の前で地面に座っている女性に青年は聞いた

「大丈夫か？」しかし、聞かれた女性はキョトンとしていて答えてくれそうにない。
そう考えた青年は、後ろで剣を防がれている男を睨み付け

「……消えろ」

男はたったこの一言で竦み上がり剣を捨て、森の中に逃げて行った。
青年は男が逃げるのを見た後、目の前でいまだにキョトンとしている女性に

「大丈夫か？」

と聞いて手を差し出しながら言った

「俺の名前は黒沢　蛮（クロサワ　バン）

第3話　女の子

「俺の名前は黒沢（クロサワ）　蛮（バン）」

青年バンは目の前に座りこんでいる女性に手を差し出しながら自分の名前を名乗った。
しかし、女性はバンの声で我に帰ったのか『ハッ』とするとバンを睨み付け、手を払いのけて走ってどこかに行ってしまった

「んだよ、愛想ねぇなぁ」
バンはそう言うと誰に言うでもなく独り呟いた

「ここどこだよ……」

バンの声は悲しく森に響いた。
それからバンは感を頼りに森を進んでいった。

そして湖を見つけたバンは近くにあった岩に腰かけ、背中にある剣を目の前に置き、剣を手入れしようとしていた。

バンが持つ剣は片刃で刃がノコギリの様に大きなギザギザの物。
そして、片刃だけを残し他の刃の部分は白と黒の鉄で覆われていた。
そして柄の長さは、６０ｃｍくらいで柄と刃の接合部には四角い鉄があり、その中には鎖が埋めこまれ鎖の先端にはチェーンソーに着いているような引っ張る物が着いていた。

バンが剣の手入れを終え湖近くの岩でくつろいでいると、前方の草村からガサガサと人が歩く音が聞こえ、バンは前を見て剣を手にした。

前方の草村から出て来たのはまだ十歳にもならないような女の子だった。
女の子はバンの事に気付かず湖の近くにトテトテと近づき、湖に両手を入れて　手の平を、お椀のようにし

……バンの方に向かって水をかけた……

湖はある程度は広い為に、真ん前にいるバンにはかからなかったが、女の子は水が上がった方を見てバンと目があった。
目があった女の子はバンの方を見て『ぼぅ』っとしていたが突然『ビクッ』として湖から離れようとした。
が、湖の何かに躓いたのか湖の近くでバランスをとろうと必死になっていたが、結局バランスをとることは出来ずに

『ドボンッ』

と湖に落ちた……

「あ、落ちた……」

バンは女の子が落ちた事に対して大きくリアクションを取らずに『ボー』ッとしていた

「って、落ちたぁ～！！」
リアクションを取らないのではなく頭が『ボー』っとしていて取れなかったらしい。
バンは装備をはずし湖に潜り女の子を救出するために動いた。

……15分後……

湖の近くには湖に落ちた女の子とバンは水浸しで岩の近くで火にあたっていた。

「大丈夫か？」
「……」
「痛いとこないか？」
「……」

バンは先程から何度か女の子から痛い所はないか？
などと聞いているが返事は帰ってこないで、ただ女の子はバンを『ジー』っと見ている。
そしてただ向かいあって座っているだけという奇妙な物が出来た。

「くしゅんっ」
女の子がくしゃみをしたのでバンが

「寒いか？」

と聞いても返事はない。
バンは自分が先程着ていたコートを持ち女の子に近付く。
女の子はバンが近付くと体を強張らせ小さくなった。しかしバンがコートを女の子の体を包む様にかけてやると、女の子は『キョトン』としてバンを見ていた。
「あったかいか？」

バンは女の子から返事が来ないと思いつつ尋ねる

「……」
（ダメか、……）

バンが思ったとき、
『キョトン』としていた女の子はバンを見ながら

「あったかい……」

と笑ってバンの体に抱き着いた。
バンは女の子が抱き着いてきたのに驚いたが女の子の頭を撫でてやると女の子は
「エヘヘッ」

照れていたがどこか嬉しそうな顔をして笑っていた。しばらくそうしてると女の子が顔を上げ

「お兄ちゃん、お名前何て言うの？」
「俺か？俺は黒沢　蛮って名前だ」
「クロサワ　バャン？」
「ハハハ、ちょっと違うな、バ・ンだ」

「バャン！！」
「んー、バ・ン」
「バ・・・ン？」
「そうそう、俺の名前はバン」
「バン！！」

バンを指差しながら言う女の子

「バン！！お名前バン！！ユイ！！お名前ユイ！！」

第４話　ユイの村（前書き）

今回からバン視点にしてみました。何か不具合があれば教えてください。

第４話　ユイの村

今俺こと黒沢　蛮は湖であった女の子、ユイと一緒にユイの家に向かっている。
何故かって？
説明するとこんな感じ

俺に抱き着いて名前を聞いてきたユイは、俺から離れるどころか

「バン！！バン！！」

笑いながら俺の名前を連呼し、さらに抱き着く力を強め離れようとしない。
ユイが飽きるまで頭を撫でてやろうと決めた俺は、かれこれ３０分近くずっと撫でている。

「お腹へったぁ」

ユイが突然自分がお腹へった事を知らせてきた。俺は今食べる物どころかお金すらない状態で、ユイが俺の心情を感じたのか

「バン、あのねユイのお家くるぅ？」

ユイがそう切り出した。俺は考えるまもなくユイの頭を撫でながら
「ん～、んじゃユイの家にお邪魔するかな！いいのか、ユイ」
「うん！！バンお家くるぅ！」
ユイは俺が頭を撫でているせいか嬉しそうに笑いながら言った。

そして今にいたるわけだ。俺はユイを肩に乗せてユイの指示どうりに進んでいく。
それからしばらくすると村が見えてきた。

「あれ、ユイの村ぁ！！」
ユイは村が見えたと同時に俺の肩から飛び降り村に向かって走っていった。
そのせいでユイとは、はぐれたが村は見えているのでまぁ迷う事はないだろ。
俺が村の入り口に行くと、腰に剣を挿した男性二人とユイがなにやら揉めていた。

「バン、悪い人じゃないもん！！」

……どうやら揉めているのは俺の事らしい。
俺が後ろから近づいたのに気付いたユイは俺に抱き着き

「バン悪い人じゃないよね！！ユイ達に酷い事しないよね！！」

ユイは泣きながら俺に抱き着き俺の服に顔を埋めた。
「ユイ、どうした？」

「……ンッ……バン……ユイ、助けて……くれたもん……バン……悪い人じゃ……ないもん……」

ユイは泣きながら言ったが俺はさっぱり状況がわからずユイの頭を撫でてやるしか出来なかった。

「この村には村の外部のものは入れない掟だ。すまないが立ち去って貰おう」

村の入り口に立っている男性の一人がそう言ってもう一人が俺を見ながら剣を握った。

俺はどうしたらいいかわからずただ剣を握った男を見ていた。

「ユイ、おいで」

そんななんともいえない空気の中に村の中から凛とした女性の声が聞こえた。ユイは声のしたほうを見て泣きながら女性の元へと走って行った。

ちゃっかり俺の手を掴んだユイと一緒に村に入ってしまった俺。

そんな俺を呆れた様に見る女性は

俺が森で助けた女性だった

そして俺はその女性のおかげで村に入る事が出来た。何故入れたのかはよくわからんが、女性が男性二人に耳打ちしたらすんなり入れ

た。
その時聞こえた事は空耳だと信じながら俺は村に足を踏み入れた。

それからは簡単だった。ユイが俺の手を掴んで村のあちこちの説明と紹介をしてくれる。
それを聞きながらユイの説明に補足を付けていく女性と、ユイの説明と女性の説明をしっかり聞いている俺がいた。

村全体の説明が終わると、既に日は落ち、すっかり夕飯時になっていた。

「バン、一緒にご飯食べよ！！ねっねっバン！？」
「ん、じゃあご馳走になるかな？いいかい？……えっと名前……何て言うんだ？」
「そういえば言ってませんでしたね。私の名前はアヤ。ユイの姉です」
「えっと、じゃあアヤ夕飯ご馳走になってもいいか？」
「えぇ、特に問題はないのでいいですよ」

そう言って笑った。

でも俺は見ちまったんだアヤが何かに怯え震えていたのを……

…

第5話　薪わり（前書き）

書き方を戻しました！！後短いです！！

第5話　薪わり

バンはユイ、アヤ姉妹の家で夕飯をご馳走になることになった。
バンは夕飯ができるまで薪わりをすることになった。
アヤが言うには

「働かざるものくうべからず。ですよ、バンさん。」
ということで、バンの後ろで体育座りをしているユイと二人で夕飯になるまで待っていた。

「なぁ、ユイ？なんでこの村はあんな村の外の奴を拒むんだ？」
「んとね、あのね、村の外の人はね、ユイ達をいぢめるの。だからね、村の外の人を入れちゃいけないって」

バンがユイからこの村の事を聞いていると、アヤが俺達の近くにやってきた。

「夕飯出来ましたよ」
「ん、じゃご馳走になるとしますか」
「ユイお腹へったぁ」

ユイは走って家の中に入って言った。
バンもユイに続いて家に入ろうとすると、

「あの……」

アヤに呼び止められる。

「どうした？」
「あの……森の中では助けて頂きありがとうございました」
アヤはそう言って頭を下げる。バンはアヤに頭を下げられ、どうしていいかわからず頭を掻いていた。

「なぁ、アヤ」
「はい？なんですか？」
「……レイザーって……知ってるか？」
「ッ！！……いえ……知りませんが、なにか？」
「実はさ、俺……」
「バン！！アヤちゃんご飯冷えちゃうよ」
ユイの声が聞こえたらアヤは、バンから顔を背け家へと向かって歩き出した
「……ったく、めんどくせぇ事になりそうだ……」
バンの呟きは誰も聞くことなく闇に消えた……

「はぁ～、食い過ぎた……」
バンはそう言ってベットに倒れた。
「お粗末様です。それにしても沢山食べましたね」
「まともな飯食ったの久しぶりでさ、つい…な」
「そうですか……」

バンは夕飯を食べた後アヤに寝床を用意しともらってベットに倒れている。

「悪い、俺もう寝るわ。ユイには明日いっぱい遊んでやるって言っといてくれ。それと、アヤの飯うまかったよ。ありがとさん」

「／／／いえ、あの、えっとその／／／」

「アヤ、おやすみ」

「…あ、えっと…おやすみなさい」

バンはアヤの真っ赤にした顔を見て、一瞬魅入ってしまったが何事もないかの様にそのまま眠りに着いた。

第6話

皆が寝静まった頃、一つの客間に包丁を持った人影がうつる。人影はベットに音を起てないように忍び足で近寄る。

「……」

人影はベットに寝ている人物を見て黙っている。その様子は何かに迷っているような、そんな顔付きだった。

「……ごめんなさい…」

人影はベットに寝ている人物に向けて言った。人影は迷っている顔から決意した顔になる。そして両手で包丁を構え、ベットに寝ている人物に突き刺そうと包丁を振り下ろす。

「え……」

包丁は寝ている人物の心臓目掛けて振り下ろされ、寝ている人物の命を確実に奪う。

はずだった。

しかし心臓目掛けて振り下ろされた包丁は、心臓どころか寝ている人物に届く前に人影の手が止まる。

いや、正確には止められた。

寝ていた筈の人物によってその命を奪う凶器は、２m近くあり鋸のような刃をした剣によって止められた。

「今日初めて会った人を、殺そうとするのはどうかと思うぞ？」

寝ていた筈の人物バンは、右手で包丁を防いでいる剣を持ち、眼を開き包丁を持っている人物をしっかり見ている。

「迷いがあるなら、吹っ切れてからくるべきだったな。アヤ」

包丁を持つ人影、アヤは無表情でバンを見ていた。

「いつ、気付いたんですか……寝ていると思ったのに……」

「部屋に入って来る前から起きてたんだよ」

「？？」

「要するに狸寝入りだよ。アヤが入って来てからな」

「……そうですか……」

「そうゆうこと……で、俺を狙った理由、話してもらえるか？」

『ズドォン！！』

爆音と共にバンとアヤがいる部屋の壁が吹き飛ぶ。

穴が開いた壁の方をみると、明らかに体格のいい悪人風な恰好をし、

右手そのものがバズーカになっている男が立っていた。
アヤは男をみると明らかに表情を変え怒りの眼差しを向けていた。
「何のつもり！！マムシ！！」
マムシと呼ばれた男はアヤに眼を向けると、喜びに満ちた眼をする。
「アヤァ、久しぶりだなぁ、捜したぜぇ。ったく急に牢からいなくなるからよぉ」
男、マムシの眼はアヤを嬉しそうに見つめていた。見られているアヤの眼は対象的に、敵意を剥き出しにしていた。
「アヤァ、さっさと戻ってこいよぉ。じゃないと大事なお母さん、死んじゃうよぉ」
「っ！！お母さんに何をした！？」
「俺は何もしてないよぉ。ただ、牢のモンスターを少し増やしただけさぁ」
アヤの顔が見る見るうち青くなっていった。
「そ……んな……」
「ヒャハハ、今ごろ何人喰われたかなぁ？？ヒャハハハハハ！！」
バンの隣でアヤは地面に座り込む。
「おい、マムシ」
「ヒャハハ、あぁ？」

バンの問い掛けにマムシは明らかに苛立った

「あんた、誰に向かって口聞いてんのぉ??」

「てめぇのいる組織の名前はなんだ」

マムシはバンに対して明らかに怒りの表情を向ける。

「あんたぁ、ちょッと調子乗りすぎだねぇ。やっぱさぁ『レイザー』の組織の一員として…

「マムシ、てめぇの組織名『レイザー』なんだな」

「……人が喋ってるときは最後まで」

「組織名『レイザー』なんだな」

「……もぅ我慢ならねぇ!!組織レイザーの名の元においてぶっ飛ばす!!」

マムシは右手と同一化しているバズーカを構えバンに向かって撃つ。

『ズドォン!』

「ヒャハハハハハ、調子乗りすぎるからこうなるのさぁ!!」

バンがいた場所からは煙が立ち込めていてバンとアヤは全く確認出来ない。

『ガアアァァァ!!』

「っな!!」

バズーカの爆音に負けない位の爆音がなると同時に、バンの居た場所の周りにあった煙が全て吹き飛ぶ。煙が晴れると同時に

「っ!!あんたどうやって助かりやがったぁ!?」

鋸のような刃が回転し、
『ドッドッドッドッ』と音を出す剣を肩に担いでいる、無傷のバンとアヤがいた。

「あ、見てわかんねぇか？剣で防いだに決まってんだろうが！！」

バンの大声と威圧感にマムシは本能で感じた。
やばい。あいつはやばい。『殺される！！』
そう感じたマムシは直ぐさま逃げた。

「『レイザー』の組織の奴らは全員、殺す」

マムシの後ろで聞こえると同時にマムシの意識は途切れた。

第7話　頼み

アヤの眼の前にはありえない光景があった。

「なに……これ……」

周りに広がるのは魔物と呼ばれるモンスターの死体。その中心にいるのは、鋸のような刃を高速回転させて、『ドッドッドッ』と音を起てているチェーンソーのような剣を持っているバンがいた。

……30分前……

バン視点

さっき『レイザー』のマムシとかいう野郎はぶった切った。
アヤは俺の方を見て唖然としていた。

「どういうつもりですか……」
「何がだ？」
「何がって……『レイザー』の名前を知ってどうして殺したんですか！？わかってるんですか！？あなたが殺した男の組織の強さ、残虐さ！！」

……まぁ無理もないか、今まで絶対に逆らえない奴らだと思ってた組織の一員を殺したんだからな。

「全部知ってる」
「っ！！、じゃあどうしてですか！？」

「頼まれたんだよ、あんたの父親に」
「……父……に？」
「あぁ」
「で、でも父は戦争で死んだって軍の人が、
「死にかけだったのを助けたんだよ。俺の親父がな。今は軍から離れて、ある村で俺の両親と暮らしてる。」
「……ほん…とう…ですか？」

懐から一枚の写真を出してアヤに見せる。

「アヤの父親の『今の』姿だ」

写真の中には少し筋肉質でがたいのいい中年の男性が優しい笑顔で笑っている

「信じたか？」
「……は……い…」

アヤは俯き小さく震えていた。

「……あり……う…、ありがとうございい……ます」
「泣くのも礼を言うのも早ぇよ。俺が頼まれた事は二つだ、まぁ今日はもう遅いから寝てろ。」

アヤは俯いたまま小さく頷いた。アヤはそのまま自分の寝室に戻って行った。

「さて、と。……いるんだろ？出てこいよ」

森の方へ向けて言った。

すると、のそりのそりと黒い影がでてきた。
　影の正体は魔物。
猿のような体で腕はこれでもかというほどでかい、その先はなんでも八つ裂きに出来そうな爪。全長約３ｍ。そんな奴が見た感じ１０匹以上はいる。普通の奴はこの光景に腰を抜かすか、即刻逃げ出すだろう。
ただ

俺には関係ない

何匹居ようが、雑魚が群れた程度で俺は臆さない。
それは今まで親父とくぐり抜けてきた、死線の数から来る自信なのか、はたまた違う物かはわからない。
　ただ俺は臆さない。

『ガアアァァァ！！』

剣の引っ張る部分を引っ張ると刃が回転を始める。

「死ね」

襲い掛かってきた魔物を、引き付け

『一閃』

横降るだけで魔物三匹を切る。返しの刃でまた切り付ける。
　そうして闘い終わったころアヤが外にでてきた。

「なに……これ……」

まぁこれが３０分であった事だ。

そんなこんなで俺達は今居間にいる。

……シャレじゃないぞ？

まぁとりあえずいる。

理由は俺が頼まれた事二つの説明。

一つは『レイザー』からのアヤ、ユイ、母親の救出。

二つは、組織『レイザー』の壊滅。

さすがに俺の目的を知ったアヤは驚いていたが何とか納得してくれた。

第8話　結婚！！（前書き）

なんかもう色々とすいませんでした！！次はキャラのプロフィール載せますんで！！

第8話　結婚！！

ここに来た目的を聞いたアヤは納得し

「夜更かしはお肌に悪いので、私は寝ます」

そう言って自分の部屋に戻って言った。

ってかもう夜中の2時過ぎだから、お肌も何もあったもんじゃないと思うのは俺だけか？

「ま、いいや」

考えるだけ無駄だしな。俺も寝るか。そう思って布団に入りそのまま眼を閉じた。睡魔は案外限界だったのか、すぐに眠ることが出来た。

……次の日……

ん～、なんかこの抱き枕すんごい気持ちいい～

なんか柔らかいし、いい匂いするし、上の方サラサラするし……

そう思うと無意識に持っと強く抱く。

ん？なんか唇に柔らかいもん当たったけど……

ま、いいか……

あれ、抱き枕が離れた。
と同時にアヤの声が聞こえてきた
。
「バ、バンさん、起きて下さい！！」
なんか声が近いような……どうでもいいや。
「ん～もうすこし寝かせてくれぇ～」
そう言って抱き枕を抱き寄せるとまた唇に柔らかいものが当たる。
「んっ」
ん……？、なんかおかしくないかい？
……寝るとき抱き枕なんてあったっけ？
そう思ってゆっくりと眼を開ける。
「……」
「……」
アヤの顔が物凄い近くにあった。しかも、眼は潤んでいて、顔は真っ赤だ。
しかも、
キスしてる。
……キス？……
……誰が？……俺が？…アヤと？……

……はあぁ！！？

「ちょっとまてやあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

即座に抱いているアヤを、解放して直ぐさま体を起こし距離をとり、土下座の体勢へ！！

「すいませんでしたぁぁ！！もう、なんか色々とすいませんでしたあぁ！！」

「……」

あれ？反応なし？

不思議に思って、そぉっと土下座していた頭を上げてアヤの顔をみる。

「……ヒック……」

泣いてるうううぅぅぅ！！

「あ～っと、その、えっと、……ほんとすいませんでした……もう、ほんと何でもしますんで」

「……何でも……ですか？」

アヤは顔を上げて俺の方をみる。

「……なら……」

「なら？」

あ～、消えて下さいとか、死んでください、とか言われたらどうし

よう……

「…責任……とって下さい」

「責任……か？」

アヤは真っ赤だった顔を、さらに真っ赤にして言った。

「私と……結婚してください……」

「もう結婚でも何でもしますんで消えて下さいとか言わないで……って、結婚？」

「はい……」

「はあぁぁぁぁぁ！！」

「ダメ、…ですか？」

いや、ダメとかそういうんじゃなくて！！展開変わり過ぎじゃないか！！おい！！ってか、そんな顔真っ赤にして不安げにしながら言われたら断れねぇじゃねぇか！！！

「いや、ダメって訳じゃあないけどよ」

「じゃあ、ふつつか者ですがよろしくお願いします。バンさん、」

プロフィール（前書き）

これからもよろしくお願いします。

プロフィール

バン

年齢　１７歳
身長　１７５ｃｍ
体重　７０ｋｇ
外見　髪と眼は朱色でウニの用にツンツンしている。顔は本人いわく普通らしい。黒のコートを着ており、目付きが悪く、恐い人の用に思われがちだが、人助けを生き甲斐とする優しい心の持ち主。

アヤ

年齢　１６歳
身長　１６２ｃｍ
体重　？？ｋｇ
外見　髪と眼は黒で、肩より少し長めのストレート。スタイルは、出る所は出て引っ込み所は引っ込むというスタイル抜群。顔はかなりの美女。

ユイ

年齢　５歳
身長　９５ｃｍ
体重　？？ｋｇ
外見　アヤと同じ黒い髪と眼。髪型はポニーテール。初対面の人にはかなり、怯えるが、実はかなりの甘えん坊。

世界感

一般的には同じですが、
色々と違う点があります。
一つ　この世界には学校がありません。なので子供達基本的には親と一緒に仕事をしています。文字などは、親に教えてもらいます。
二つ　階級が存在します。王族、貴族、兵隊、平民そしてこの身分に当て嵌まらない人達は、貴族に使えたり、山賊になったり、空賊になったり、奴隷になったりしてしまいます。
三つ　そして魔物がでます。色々な姿をした、魔物がいます。今は多くは語りませんが物語が進むに連れてだんだん魔物がどういう存在かが、わかってくると思います。
四つ　お金です。数えかたなどは変わりありません。ただお金はあまり物語には出て来ません。予めご了承ください。

第9話　返事

というわけで、俺とアヤは結婚することになりました。わぁ～、よかった、よかった。

っていいわけねぇじゃねぇか！！

まぁ、あの後、色々話した結果、とりあえずアヤ達を親父さんの家に届けてから親父さん達を入れて話し合う事になった。

そんな訳で、結婚の話が後回しになり、今は俺が借りた部屋でアヤ、ユイと話し合っています。

「それで、これからの事を話たいんだけど……」

「はい♪」

「はぁい」

アヤとユイが元気よく返事してくれる。

が、

「アヤ、ユイ」

「はい？」

「はぁい？」

「腕から離れろ。暑ぐるしい」

「嫌です♪」

「イヤ♪」

さっきからこんな感じで話が進みません！！

ほっといて話を進ませようとすると、

「ぷに」
「ぷにぷに♪」
頬を突かれて話が出来ません！！そんな事を１０分位続けていたら、さすがに俺の頬も赤くなって来たのでそろそろ本題はいります。
「アヤ」
「はい♪」
「腕にくっつくのはいいが、突くのはやめてくれ。話が出来ん」
「はい♪」
すんなり突くのはやめてくれた。この１０分はなんだったんだ？
「ふぅ、それで本題にはいるけど『レイザー』の拠点は何処かわかるか？」
「ここから、西に少し歩いた所です」
アヤは笑顔で言ったが、眼はどこか虚ろだった。
「アヤ」
「はい♪」
「嘘だろ？」
「ほんとです」
「アヤ」
「はい♪」
「西に少し行った所じゃなくて、東だろ？」
「いいえ、西です」
「……まぁ、いいや。これから組織の拠点に行くけど着いてくるか？」
「……はい……」
アヤの返事に元気がなくなる。理由はわかりきってるから、どうしようって訳でもないんだが、
「アヤ」
「はい？」
「怖いか？」
少し俯いてから小さく怖いと、言った。

当たり前か、奴隷のように扱われたんだから。
「一緒に行くか？」
「行かせてください」
行くって言ってるからには相当な覚悟はあるんだろうな。まあ、危なくはないからいいけど。
「なら、準備だけでもしてこい。終わったら俺に声かけてくれ」
「わかりました」
そう言ってアヤは部屋からでていった。
　さてと、アヤはこれでいいとして問題は
「バン？」
と可愛いらしく声をかけてくるユイだ。まだ小さいからあんまり話をわかってないだろうけど、
「バン、なんかかくしてる？」
……ん～、ちょっと驚きだ。アヤには、ばれていないのに、ユイには感づかれていた。
「心配すんな、ちゃんと親父さんの所まで連れて行ってやるから」
「うん！！」
ユイの頭を撫でてやると嬉しそうな顔で笑った。
　それから少しして準備が終わったとアヤが言いに来た。その腰には細長い剣が着いていた。
「アヤ、その剣は？」
「これですか、これ父が私にくれた物なんです。護身術程度なんですけど、私も一応剣は扱えるんですよ。まだまだですけどね」
そう言ってアヤは剣を手にとり構え、そしてまた腰に着けた。
「よし、んじゃ行くか」
「はい♪」
「うん！！」
そして俺たちは東に向かって歩き始めた。

第１０話　相棒

……びっくりだ……

ん？なにがって？そりゃあ……なぁ？
だってアヤは護身術程度だって言ったよな？なのに魔物とか倒せるのか？
……イヤ、一匹とかならわからなくもないけどよ、なんで１０匹くらい一気に相手にして一瞬なの？
囲まれたと気付いたら、次の瞬間にはもう全滅してたよ！！
「……」
「バンさん、どうしました？」
「……すげえな…」
「えっ、そうですか？」
だって一瞬だったよ。普通にすごいだろ。
「アヤちゃんすごぉ～い！」
「ありがと、ユイ」
「なぁ、アヤ？」
「はい？」
「なんでマムシ来た時それ使わないかった？」
「だって……」
そう言ってアヤは涙ぐむ。……やべっ！！また泣かしちまった！！
「あ～、もう」
「ふにゃっ」
アヤをそう言って抱きしめる。
「ワリィ、やな事聞いちまったな」
「……いえ…」

「怖かったんだよな」
「……はい…」
「ごめんな」
そう言って、さっきよりアヤを強く抱きしめる。
しばらく俺の胸に顔を押し付けて声を殺して『う〜』って、泣いていたが時間がたつと落ち着いてきた。
「バンさん」
「ん、どうした？」
「……してください…」
「何を？」
「……キスしてください…」
「……マジで？」
「マジです」
「……本気で？」
「本気です」
「……マ
「しつこいです」
「……」
「ジ〜〜〜」
なんかすんごい見られてるよ！！
……あ、ヤベェ。すんげー可愛いいんだけど…
「ダメ…ですか？」
「……」
不安そうな顔でこちらを見てくるアヤ

「あの、バ
『チュッ』
「っ！！！！」
最初、アヤはかなり驚いていたが途中から眼を閉じ抱き返した。そして、しばらく余韻に浸っていた俺とアヤだったが、足元から聞こえたユイの声で我に帰り慌ててアヤと離れる。
「んっ……」
アヤは物悲しげに俺を見ていた。なので頭を撫でてやると嬉しそうに笑った。
「おいおい、ずいぶんと見せ付けてくれるじゃないか？バン？」
突然聞こえた表皮とした男の声に過剰に反応したのは、アヤとユイだ。声が聞こえたらすぐに俺の後ろに隠れて、声のした方を睨んでいた。
声のした方には、長身でヒョロっとした白髪の男が立っていた。
「どこから見てたんだよ、しかもご丁寧に気配まで消してよ。趣味ワリィぞマサキ」
「バンが女の子を泣かせた当たりからだよ♪」
「ほとんど最初からじゃねぇか」
「…あの、バンさん？」
「どうした、アヤ？」
「お知り合い……ですか？」
「あぁ、そういや言ってなかったな。こいつはマサキ。俺の相棒だよ」
「相棒……ですか？」
「そっ、はじめまして。バンの相棒してるマサキだよ。よろしくね」
そう、この長身で飄々とした奴は俺の相棒のマサキ。まぁ、最初は殺し合いしてたけど、まぁ色々とあって相棒になったんだ。
「で、バン。この女の子達はどなた？」
「あぁ、この後ろに隠れてるのがユイ。そんで俺の隣にいるのが
「バンさんの婚約者のアヤです。」

「そう、婚約者のアヤだ。って違うわああぁぁぁぁぁ！！」
「そっか、バンの婚約者さんか、よろしくね。アヤさん♪」
「話しを聞けぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」
「はい、よろしくお願いします」
「お前も頷くなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「バンも隅に置けないないなぁ♪」
「ちげぇっつってんだろうがぁぁぁぁぁ！！！！！」
「バン、うるしゃい」
「ッ！！！……」
ユイに最後を締められて俺は黙って沈黙するしかなかった。
「ハハハ、バンをいぢるのは終わりにして、本題に入ろうかい♪」
「こっの野郎……」
「ハハハ、睨まない。睨まない」
「……まぁいいや。んでちゃんと全員助け終わったのか？」
「もう終わったよ」
「さすが。お疲れさん。相変わらず仕事がお早い」
「ありがと♪」
さて、頼み事も終わったし後は、アヤ達を届けて終わりか。って
「アヤ？」
アヤがすごいキョトンとしている。
「どうした？」
「あの仕事って？」
「あぁ、さっきも言ったろ。頼み事の一つをマサキに頼んだんだよ」
「頼み事の一つ？」
「そっ。僕がバンから頼まれたのはレイザーの壊滅と、レイザーに捕まってる人達の解放。もう終わって、解放した人達はバンのお父さんの村にいるからね。ちなみにレイザーは壊滅したよ♪」
「レイザーが…壊滅？」
「うん♪」
「……じゃあ私はもう……」

「もう怖い事なんてねぇって事だよ。アヤ」
震えてるアヤの頭に手を置いて笑っやる。
「さぁ、泣くのは後だ。さっさと帰って親に会いにいこうぜ」
「……はいっ！！」
「ユイもお母さん達にあえるの？」
「言ったろ。合わせてやるってな」
「バン！！大スキ！！」
言ってアヤとユイは抱き着いてきた。
もちろんマサキに茶化されたが。

第11話　迷った

それで久しぶりに村に戻る事になった、俺達四人は今森の中をひたすら歩いてる。そう、ひたすら……

「バンさんここどこですか？」

「森」

「私達はどこに行こうとしてるんですか？」

「親父のいる村」

「……バンさん一つ聞きたいんですけど…」

「なんだ？」

「迷いましたか？」

「……いや迷って」

「迷いましたね？」

「……いや」

「迷いましたね？」

「……い」

「迷いましたね？」

「……」

「バンさん？」

「……ごめんなさい」

「「「ハァ」」」

んな、みんなでため息つくなよ！！そうだよ迷ったよ迷いましたよ！！なんか悪いかコラァ！！

「バンさん」

「ごめんなさい」

「情けないなぁ、バンは。ホントに僕の相棒かい」

「うっ……」

「ハァ、なんで方向オンチのバンが先頭歩くかなぁ。自分で方向オ

ンチだって事がわからないわけではないでしょ。全く」
「ダァーッうるせぇな！！悪かったな方向オンチで！！ってかマサキもわかんないから俺に着いてきたんだろうが！？」
「失礼だなぁ、バンは。道ぐらいちゃんと覚えてるさ」
「じゃあテメェが前歩けぇぇぇぇぇぇ！！」
「やだよ、めんどくさいし♪」
「ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「バンうるしゃい」
「っ！！……」
ユイに言われて黙るしかない俺。

前もこんなことなかったか？
「さて、バンをいぢめるのもやめてサクサク向かおうか」
「そうですね」
「うん」
……なんか置いてかれてないか？気のせいかな？うん気のじゃないね。その証拠にマサキ達を見失う。……ん？
「置いてくなぁ！！」
ダッシュする俺。
ダッシュで逃げる三人。
「待てやこらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「やだ♪」
「いやです♪」
「いやぁ♪」
「ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
こうして森の中をダッシュする四人組。

１２話　親父

あれから３０分後。マサキが先頭を歩きようやく見慣れた景色になってきた。

「やっと見慣れた景色になってきたな」

「アハハ、そうだね♪」

「マサキさん、もう村が近いんですか？」

「うん、そうだよ♪後はバンが先頭を歩いても村に着くぐらい近いよ」

何気にその例えひどくないか？

「そうですか。ならもう近くですよね。よかったわねユイ」

「うん！！もうバンのせいであるきつかれたもん」

……何気にユイの発言が一番きついんだが……

「なぁ、俺ってそんなに方向音痴か？」

「「うん」」

「はい」

「……そんな即答しなくてもよ……」

何気に傷付いている俺を横目に、アヤ達四人は何事もないかのように歩いて行く。

四人？

確か村に帰るメンバーは俺、マサキ、アヤ、ユイの四人だったよな？んで俺がマサキ達の後ろにいるんだから見えるメンバーはマサキ、アヤ、ユイの三人だよな？

……見間違いか？……

そう思って眼を擦ってもう一度みてみる。

四人だ。

一人は細身の長身の俺の相方のマサキ。
一人は腰までかかる黒髪ストレートのアヤ。
一人はアヤの横をてくてく歩くユイ。
一人はかなりがたいがよくて笑いを堪えているヒゲづらオールバックの親父。

??

「親父いいいいいいいいいいいいいい！！？」

「なんだバン。今頃気付いたのか？」

「今頃っていつからいたんだよ！！？」

「マサキが先頭を歩いてる所を見かけてな。何となく着いて来たんだ」

そういって親父はガハハっと豪快に笑った。相変わらず豪快な親父だな。

「所でバン？」

「なんだよ？」

「お前の後ろにいる女の子達は誰だ？」

俺の後ろに隠れてチラチラと親父を見ている二人を見て言った。

「このちっこいのがユイ。」

「ユイちゃんか。よろしくね。」

親父が手を差し出すがユイは親父の手と、俺の顔を交互に見ている。

「ふむ」

親父が差し出した手を引いて握りこぶしを作ってユイの顔の前へと持ってきた。

「ユイちゃん。何か好きな物はあるかい？」

「……お花…」

「お花か。じゃあこれはおじさんからのプレゼントだ。」

ユイの前にあった握りこぶしを『パッ』と開くと親父の手の中には、綺麗な花があった。

「はい、どうぞユイちゃん。」

ユイは驚いて固まっていたが、花が咲いたように明るく笑って親父から花を貰った。

「ありがと！！おじさん！！」

「ガハハ！！どういたしまして！！それでバン。その女の子は？」

「あぁ、こいつは

「婚約者のアヤです」

「そう婚約者のって違うわあああぁぁぁ！！」

「ほぅ、バンも隅におけんなぁ」

「話を聞け、くそ親父ぃぃぃぃぃぃぃ！！！！」

前もこんなことなかったかと思ったバンであった。

「隅におけませんね、バンさん♪」

「お前が言うなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

13話　再開？

「で、バン。この子達がそうなのか？」

親父が急に真顔で俺の方をみる。まぁ、言いたい事はわかるんだが、

「そうだよ」

「そうか……バン悪いがユイちゃんとアヤちゃんに話があるから外してもらえるか」

親父はアヤとユイをみたまま言った。なにも言わずに俺とマサキは立ち去る。

「悪いな、バン。それにマサキも」

「気にすんなよ、親父」

「そうです。おじさんには僕もお世話になってますしね」

俺とマサキはそういって立ち去る。その場にはアヤとユイと親父が残っていた。

アヤ達から離れて歩いていた俺とマサキは黙って村を歩き回っていた。

ふと、何かに気付いたマサキが難しい顔をして何かを考え始めた。

「どうした？難しい顔して？」

「ん、たいした事じゃないんだけどね……」

「なんだよ、らしくねぇな」

「……多分、東の方で戦いが始まった。距離はかなり遠いけど三日もしたら僕たちの所にも広がるかもね。」

そうか、と言って俺は空を見上げる。

あれから俺とマサキはまた黙って歩き始めた。しばらくするとアヤ達三人が戻ってきた。

「何を話してたんですかバンさん？」

「なんでもねぇよ。気にすんな」

アヤは膨れていたが無視。そして、たわいない話をしながら村を歩いた。

しばらくすると大きな木の家が見えて来た。

「さて、ここが俺の家だ。正確には『皆』の家なんだがな」

「……大きいですね……」

「そりゃそうだよ。この家にはバンや僕の家族だけじゃなくて、他にもいっぱいいるからね」

「他にもいろんなひとがいるの？」

「そうだよ。ユイちゃん、その人達のことは後で紹介するよ」

「ところでバンさん」

今まで黙っていた俺に話しかけるアヤの顔は真剣な顔で何かに緊張しているようだった。

「……あの、私の…いえ、私達のお父さんとお母さんは？」

「何処って……」

「「ここだよ」」

「ひゃあ！！…ってお父さん！？お母さん！？」

「久しぶりだなぁ、アヤ、ユイ」

「久しぶりねぇ、アヤ、ユイ」

おぉ、驚いてる驚いてる。まぁ当たり前か。
家族……か……

「何暗い顔してんだよ、バン」

「なんでもねぇよ」

「……誰が何と言おうとお前はお前だ。俺のバカ息子だよ」

「そうだよ。バンは僕の大事な相棒で方向音痴なバカやろうだよ♪」

「……慰めるのか、けなすのかどっちかにしろよ」

「バカ息子」

「方向音痴のバカやろう♪」

「……『ガアアアァァァァァ』」

無言で刃を回し始めた俺。それを見て顔を青ざめるマサキと親父。

『ドッドッドッドッドッドッドッドッ』

「……バ、バン落ち着け、悪かった調子に乗りすぎた」

「ご、ごめんよ。冗談だからとりあえず剣を持ちながらこっち睨むのはやめよう？本気で怖いからさ」

『ドッドッドッドッ』

すこしずつ後ろに下がる二人。すこしずつ距離を詰める一人。

「あの、バン？相棒に剣を向けるのはどうかなぁ、とか、ちょっとずつ近づいて来るのはなんだろな？とか突っ込みたいところ満載だけど、とりあえず落ち着こう？ね？」

「そ、そうだぞバン。父親に剣を向けるのは息子としてどう

親父が話してる最中に言葉を入れる。

「死ね」

「「ギャアアアアアアアアアアアア」」

二人の悲鳴が村中に響き渡った夕方だった。

終わり

今俺達の目の前にはたくさんの人がいる。

「アヤ、ユイ」

後ろに隠れている二人に声をかける。

「なんで後ろに隠れてんだ？」

「えっと…」

「んと…」

「……ったく、ほれ挨拶しろ」

そういって後ろに隠れていたアヤとユイを前にたたせる。前に立たせるときに、なんか焦ってたけど無視。立たせた後に俺と、目の前の人達を交互に見てる。

…ハァ、なんでこんなことになったんだか……

まぁ、全部マサキのせいなんだけどな。あいつが村の人達に声かけて自己紹介しろなんて言わなかったら今頃平和に寝れてるんだけどな…、

今……

今……頃…？

「そうなんです。バンさんの婚約者のアヤです」

「ユイです！！」

……な、和んでる！！

って

「待てやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「うるしゃい、バン」

「……」

このごろユイが冷たい気がするんだが……嫌われたか？

「さて、バンが落ち込んでるけどほっといて。ささ、解散、解散。アヤとユイは部屋を案内するからちょっと待っててねぇ♪」

「「はい」」

なんか釈然としない気分の中時間が過ぎていく。

夜

みんなが寝静まっている村を出ようとする二人の影があった。
「いいの？二人を置いて来て……」
影の一人、マサキが言った。
「いいんだよ、どうせ村にいても俺達は邪魔だろうしな」
「……本音は？」
「戦いに巻き込みたくない。それに、これからは俺達の戦いだ」
「まぁ、そうだけどね」
「それに元々俺はアヤとユイを村に置いたら旅を続けるつもりだったしな」
そう、俺はアヤとユイを村に置いたら旅を再開するつもりだった。
その為アヤとユイが村になじめるか不安だったが、特に問題もなさそうだから安心して旅を続ける事ができる。
「そろそろ村で落ち着こうとかは思わないのかな。バンは」
「……逆に聞くが俺にできると思うか？」
「まぁ、無理だろうね。今のバンならね」
「？どういう意味だ？」

「足りない頭で考えれば、ただでさえ普段使わないんだから♪」

「うるせーよ！！」

「はい、話は終わり。……着いたよ」

マサキは俺の文句を聞き流し前を見据える。少し先には戦いの準備をした軍。

「さて、やるか相棒」

「わかったよ、相棒♪」

俺は剣を構えマサキは槍を構える。

そして戦いが始まる

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3392b/

俺の生き様

2011年1月6日05時48分発行